

題目：第一反抗期が出現する子どもを養育する初産婦の

育児ストレスの特徴と要因—質的・量的による分析—

保健医療学専攻・看護学分野・公衆衛生看護学領域
松岡知子

キーワード：育児ストレス，第一反抗期，初産婦，支援，質的分析・量的分析

I. 研究の背景と目的

乳児期から幼児期への移行期は、子どもの反抗や自己主張が出現する第一反抗期であり、生後18か月から21か月は、親の要請に対する子どもの苛立ちや癇癪がピークを迎える。生後1歳8か月児は自己主張が出現する第一反抗期にあたり、初めて子どもを養育する母親は子どもの苛立ちや癇癪に戸惑い育児ストレスを抱えることになる。

そこで、本研究の目的は、第一反抗期が出現する子どもを養育する初産婦の育児ストレスの特徴と要因を明らかにし、育児ストレスを低減する支援の方向性を探ることである。

II. 方法

本研究のデザインは、質的研究と量的研究の2つの研究からなる。

質的研究の目的は第一反抗期が出現する子どもを養育する初産婦の育児ストレスの特徴を明らかにすることである。保健センターの1歳8か月児健診に来所した母親のうち、本研究への参加の同意が得られた26名を対象に、インタビューガイドを用いて、子育てで感じていることや困っていることについて半構造化面接を行った。分析対象者は、第一反抗期が出現する子どもを養育した経験がない初産婦14名である。収集したデータは、逐語録に起こし、内容分析の手法を用いて質的に分析した。

量的研究では、第一反抗期が出現する子どもを養育する初産婦の育児ストレスの要因を明らかにすることを目的に、保健センターの1歳8か月児健診に来所した母親683名を対象に、研究目的や倫理上の配慮を説明した後に、直接調査票を配布し、郵送にて回収を行った。回収できた263名のうち、第一反抗期の子どもの養育経験がない初産婦128名を分析対象とした。育児ストレスは、牧野の育児不安尺度のうち、育児ストレスに関連する5項目を4件法により測定し、その合計点を育児ストレス得点とした。育児ストレス得点を従属変数とし、就業の有無や親との居住距離などの属性、子どもを預ける経験や抵抗感、子育てに対する価値感、性別役割分業感などの項目を独立変数とし、Spearmanの順位相関係数を用いて分析した。有意確率5%以下を有意差ありとした。次に、有意な相関があった項目をSPSS社AMOSversion23を用いパス図を作成し、最尤法にて共分散分析を行った。

III. 倫理的配慮

質的研究・量的研究ともに京都府立医科大学医学倫理審査委員会の承認を受けた（E-268，E-167）

IV. 結果

質的研究の結果は、平均年齢は33.1±4.5歳、就労の状況では、有職28.4%、専業主婦71.4%、家族の形態では、核家族85.7%、拡大家族14.3%であった。

1歳8か月児を初めて養育する母親の育児ストレスの特徴として【子どもとその育児法に関する困難】、【支援者がいないことによる困難】、【母親自身に関連した困難】、【困っていることなし】の4つのカテゴリーが抽出された。【子どもとその育児法に関する困難】のカテゴリーには、〔子どもの成長に合わせた育児のとまどい〕、〔子どもの成長・発達が正常かに関する心配〕、〔子どもの遊ばせ方や共に遊ぶ時間の制約〕の3つのサブカテゴリーが含まれた。〔子どもの成長に合わせた育児のとまどい〕では、自由にさせすぎではないか、テレビの見させ方など「子育てはこれでいいのかと思うことがある」とことや「自我が出てきた子どものしかり方が難しい」といったコードが見られた。

【支援者がいないことによる困難】のカテゴリーには、〔身近な支援者の不足〕のサブカテゴリーが含まれた。これには、「子どもが病気の時に夫がいないと心細い」とするものや「預ける人、頼れる親がいない」とするコードが含まれた。

【母親自身に関連した困難】のカテゴリーには、〔自分でコントロールできないもどかしさ〕と〔自己の体力への不安〕の2つのサブカテゴリーから生成された。〔自分でコントロールできないもどかしさ〕では、子どもが自分と思っていることとは違うことをするのでわかってはいるがもどかしい、子どもに自我が出てきて感情のコントロールが難しいといった悩みが語られた。〔自己の体力への不安〕には、母親が眠いときは思わず叱ってしまったりすることや、「子どもが元気すぎて体力がいる」といったコードが含まれた。（【 】はカテゴリー，〔 〕はサブカテゴリー，「 」はコード内容を示した。）

量的研究の結果では、母親の平均年齢は、 32.2 ± 4.3 歳であった。就業の状況では、有職35.2%，専業主婦64.8%，家族形態では核家族94.7%，拡大家族6.3%であった。育児ストレス得点は 13.1 ± 2.9 （6～20）点であった。

育児ストレスは、単相関では、専業主婦、拡大家族、退職している、本人の親との居住距離が遠居・不在、本人か夫いずれかの親との居住距離が遠居・不在、本人の兄弟姉妹の最も行き来の多い人との居住距離が遠居・不在、定期的な社会活動をしていない、仕事をしていない、子育てに対する価値を見いだせない、認可保育所利用経験がない、保育所の一時預かり利用経験がない、子どもから離れる経験がない、仕事を理由に夫に預ける経験がない、買い物・銀行や役所に行くことを理由に夫に預ける経験がない、病気を理由に夫に預けることに対する抵抗感があると相関がみられた。共分散分析では、育児ストレスは、自分の親との居住距離が遠いこと、子育てに対する価値感を見いだせないこと、夫に子どもを預けることに抵抗感があることと関連していた。

V. 考察

第一反抗期が出現する子どもを養育する初産婦の育児ストレスの特徴としては、自我が出てきた子どもの叱り方が難しい、子どもが自分と思っていることとは違うことをするのでわかってはいるがもどかしい、子どもに自我が出てきて感情のコントロールが難しいなど、第一反抗期が出現し始めた子どもの育児を初めて経験する母親のストレスが語られていた。

第一反抗期が出現する子どもを養育する初産婦の育児ストレスの要因には、「自分の親との居住距離が遠い」「夫に子どもを預けることに抵抗感がある」「子育てに対する価値感が低い」ことが関連していた。これらはまた、母親の就業の有無に派生する要因でもあった。専業主婦の母親は原則として保育所の利用ができないため、必然的に家庭での養育者となる。専業主婦の母親は、仕事をしていないため、子育てに他人の手を借りたくないという思いがあり、子どもを預けることへの抵抗感があり、育児を母親一人で抱え込みがちとなっていた。

これらより、「子育てを手伝ってくれる人がいない孤独な状況」「子育てに価値を見いだせない」「就業継続・再開・開始の負担感」といった3つの課題が見出された。これらの課題に対し、第一反抗期が出現する子どもを養育する初産婦の育児ストレス低減に向けた支援として、専門的知識を持つ看護職は子育てパートナーとしての継続的存在となり、出産から育児までの切れ目のない支援を行うこと、育児に関する情報提供や子育ての価値感の肯定的なフィードバックを行うこと、母親に応じた就労継続支援の調整、保育所など公的支援の情報提供と調整、地域包括子育て世代支援事業の看護職の企画や参画を行う等の支援が有効であると考えられる。

VI. 結語

1歳8か月児を養育する初産婦は、子どもの第一反抗期出現に伴う育児ストレスを感じていた。第一反抗期は出現する子どもを養育する初産婦の育児ストレスは、支援者がいないこと、子育てに価値感を見出せないこと、就業を継続・再開・開始できないことに関連していた。これらより、第一反抗期が出現する子どもを養育する初産婦の育児ストレス低減への支援として、地域における子育て事業に看護職が参画し、母親が育児を一人で抱え込むことなく、育児に価値感を見出せるように母親とその家族を支援すること、就業している母親に対しては就業継続支援が重要である。

VII. 引用文献

1) 牧野カツコ. 乳幼児を持つ母親の生活と<育児不安>. 家庭教育研究所紀要. 1982 ; 3 : 34-56